

Four Library

読書ナビ

第25回

詩は、社会のアンテナである 文学部教授・渡辺信二

伊東静雄「晴れた日に」「わがひとに与ふる哀歌」
「水中花」

『伊東静雄詩集』(岩波文庫、1989年)

金子光晴「寂しさの歌」

『金子光晴詩集』(岩波文庫、1991年)

宮沢賢治「青森挽歌」「作品番号1071」

『宮沢賢治全集』I, II (ちくま文庫、1986年)

小熊秀雄「蹄鉄屋の歌」「馬の胴体の中で考えたい」

『小熊秀雄詩集』(思潮社、現代詩文庫、1982年)

シャルル・ボードレール「照応」「旅への誘い」

『ボードレール全詩集』I、阿部良雄訳(ちくま文庫、1998年)

T.S.エリオット「荒地」

中桐雅夫訳『荒地詩集1953』(国文社、1976年)

フリードリッヒ・ヘルダーリン「あたかも、祭りの日の朝」

『ドイツ名詩選』生野幸吉他編(岩波文庫、1993年)

ステファン・マラルメ「海の微風」

『マラルメ詩集』鈴木信太郎訳(岩波文庫、1963年)

エズラ・パウンド『ピサ詩篇』

新倉俊一訳(みすず書房、2004年)

R.M.リルケ「ドゥイノの悲歌」「オルフォイスのソネット」

『リルケ全集』IV, V, 富士川英郎編(弥生書房、1961年)

W.B.イェイツ「1916年復活祭」「娘のための祈り」
「ビザンチウムへの船出」

『イェイツ エリオット オーデン』平井正穂・高松雄一編(筑摩書房、世界文学体系71、1975年)

詩は、社会のアンテナである。

太平洋戦争の頃、書籍発行点数(部数ではない)で最も多かったのが詩集であると聞いた。社会の憂愁の深さのほどに詩は深いはずだ。

とりあえずは多読でしょう。文学史で言及される詩人や作品を読む。声に出して読む。音読が小説を読むときとの大きな違いです。翻訳詩も良い。まずは、定評のある翻訳で多読です。そして気に入った詩があれば、その原語に挑戦し、声を出して読む。プーシュキンのためにロシア語の辞書を繙く特権は、若者のものだ。

そして、考える。

いったい生とは何か。何故に人は人を求めて苦しむのか。

異なる言葉、異なる民族、異なる時代それぞれに、人とは何ものなので、なぜその時そこにおいて、どこへ行こうとしたのか。

翻ってわれわれのことを考える。

現代日本と、そこで読まれる現代詩は今、いかなる様相を呈するか。直視、直接、直言はあるか——果たして、現実を直視し、直に事実へ接し、率直に人間の本質を言い表そうとするか。イメージや感覚などが表現の中心であるなら、それによってもたらされる真実とは、何か。太平洋戦争に敗れた直後、英米の詩に学んだ「荒地派」が一瞬輝いた。戦後民主主義に希望を託した時期でもある。詩とは、祈り、言祝ぎ、あるいは、カタルシスを与えるほどに喜怒哀楽を浄化した表現である。だが、日本の現代詩が畢竟、一億総懺悔や黒塗り国定教科書の延長であることに無自覚ではないのだとすれば、ただに三猿の喜びを越えて出て行くことを求める。

われわれが直接的な力をとり戻すため、詩がまず直接的な力を取り戻さねばならない。言葉いじりやイメージ迷宮に楽しむ詩から脱皮し、現実を直視し時代状況を変えねばならない。考え深さや真摯さ、真面目さを「暗い」と排除する社会を放置して良いのか。

詩には詩の責任がある。それは、詩が受信・送信を含めて社会の真のアンテナであることによって果たされる。

※上記の資料はすべて立教大学図書館で所蔵しています。

おしえてライブラリー

第4回

レポートや論文をうまく書けるようになりたいのですが…

レポートや論文のための資料収集がはかどらない。レポートや論文をどのように書いたらいいかわからない。誰もがそのような思いを持ったことがあるのではないのでしょうか。そんな時、気軽に相談できる相手がほしくありませんか？

図書館本館では、ラーニングアドバイザーがみなさんのレポート論文作成のサポートを行います。博士後期課程の大学院学生が「ラーニングアドバイザー」としてレポートや論文作成について相談にのるサービスを2008年度後期から実施しています。ラーニングアドバイザーが自らの学習・研究経験をもとに、学生のみなさんからの学習やレポートに関する質問などに対して、図書館の資料を用いながら丁寧なケアを行います。是非お気軽にお立ち寄りください。

■場所 図書館本館 旧館1階グループ閲覧室2

■日時 (月曜日～金曜日) 12:00～16:00

■アドバイス内容

レポート・卒論に限らず、情報収集や学習全般のサポートをします。

A

INFORMATION

●(3月) 休館のお知らせ

停電のため、下記の日程が休館となります。ご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

2009年3月20日(金)・22日(日)

●MyLibraryからの貸出期間延長サービスがスタートしました

MyLibrary <https://opac.rikkyo.ac.jp/mylibrary/>
MyLibraryは自宅や出先など、世界中どこからでもアクセスできる図書館の個人ポータルサイトです。2008年11月からMyLibraryを通して、借りている図書の出借期間を延長できるようになりました。

MyLibraryからの貸出期間延長は、貸出後初めての延長(延長回数0回時)に限ります。延滞資料がある場合や、他の利用者から予約が入っている資料は延長できません。ご不明な点はカウンターにお問い合わせください。

その他、MyLibraryの「貸出・予約状況照会」から、貸出状況・予約状況が確認できます。

Your Library 第4号(通号63)

発行日 2009年1月30日 連絡先 TEL 03-3985-2628

編集 川崎 修(図書館副館長) E-mail your_library@ml.rikkyo.ac.jp

発行人 石川 巧(図書館長)

発行 立教大学図書館

<http://www.rikkyo.ac.jp/research/library>

メールにて、みなさんのご意見、ご感想をぜひお寄せください。

図書館で行っている図書館視察の中で、今回はアメリカを取り上げました。海外図書館事情の記事を読んだり、話を聞いたりすると、実際に見るとでは理解の度合いが全く異なり、旧来の常識にとらわれず、グローバルに立教大学図書館を評価することができたと考えています。

アメリカの図書館をたずねて

CONTENTS

②-③

今、世界の大学図書館は？
(アメリカ編)

④

読書ナビ
おしえてライブラリー
INFORMATIONPHOTO・ワシントン大学スザロ・アレン図書館
リーディングルーム

今、世界の大学図書館は？ (アメリカ編)

みなさんは普段、図書館をどのように利用していますか。読書やインターネットによる情報検索、図書館のデータベースを使ってレポートや論文のしらべものを行っている人もいます。図書館では、みなさんの学習環境の改善や充実を目指して、先進図書館の調査を行っています。2008年10月には、アメリカのシアトル、ボストン、ニューヨークの3都市にある大学図書館を視察しました。今号では、アメリカ西海岸シアトル郊外のワシントン大学 (University of Washington, Seattle) を中心に、アメリカの大学図書館の現況を紹介します。

■ 学生支援

アメリカの大学図書館では、学生の学習支援に積極的に取り組んでいます。例えばワシントン大学には、ラーニングcommons (learning commons) と呼ばれる学習エリアがあります。そこには、約350台のパソコンが用意され、座席も個人用から、利用者がグループでコミュニケーションを取りながら利用できる数人掛けのテーブル、ラウンドテーブルなどが配置されています。グループ学習室も14室あり、よく使われています。アメリカの大学ではグループ学習を利用した授業が多く、図書館でもその授業と同じ学習環境を提供しているからです。パソコンだけでなく、プリンター、スキャナ、ビデオ編集機器が利用でき、機器の使い方やトラブルの相談を受け付ける相談カウンターもあります。その他にはレファレンスカウンターや参考図書など、学生の学習に必要な基本的な機能はすべてラーニングcommonsに集中しています。



ワシントン大学オデガード図書館 ラーニングcommons



マウントホリヨーク大学図書館
インフォメーションcommons



コロニア大学
ハーレット・リーマン図書館
グループ学習エリア

■ ライティングセンター

ラーニングcommonsに置かれているライティングセンター (writing center) は、日本の大学ではあまり見られない特徴的な取り組みです。みなさんは初めてレポートや論文を書くとき、どこから手をつけていいか、どんな形式で書けばいいか、悩むことがあると思います。アメリカの大学生も全く同じです。ライティングセンターでは、チューターがレポートや論文の書き方を学生と一緒に考え、実際に自分で書けるようになるまでのサポートをします。レポートや論文の相談のほかにも、履歴書の書き方やプレゼンテーション資料の作成法、ポスターの作り方など、さまざまな相談を受け付けています。



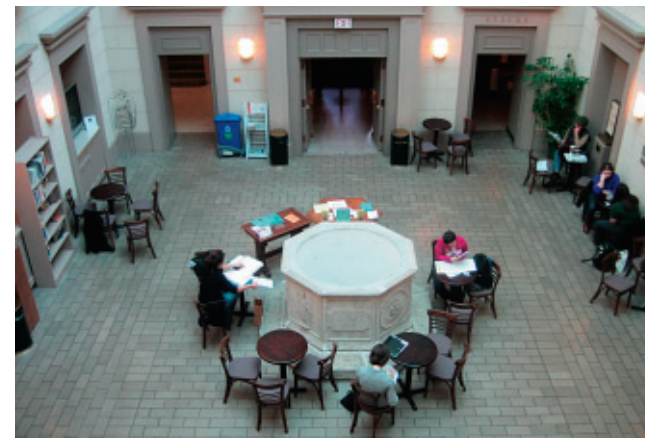
ラトガース大学
ライティングハウス

■ さまざまな図書館利用法

ワシントン大学には学部学生用の図書館として、オデガード図書館があります。日曜日から木曜日までは24時間開館しており、夜中までノートパソコンを開いて勉強をしている学生が目立ちました。利用者が最も多いのは日曜日の午後で、月曜日の朝には、徹夜をした学生が眠い目をこすりながら、授業に出ていく姿も多く見られます。

図書館では学生が、閲覧席を自分の部屋のように利用しています。すべてのスペースに無線LANが整備されており、パソコンのない閲覧席でも個人のノートパソコンが利用できるように配慮されています。

またどの大学でも、図書館と隣接して必ずカフェがあります。カフェでも無線LANが利用でき、まるで図書館にいるような雰囲気です。食事はもちろん、一人で勉強に集中する学生や、教員と学生と一緒に談笑したり議論したりする姿が見られました。



マウントホリヨーク大学図書館 カフェ



ワシントン大学
オデガード図書館 カフェ

■ 図書館建築とアート

図書館の外観は歴史を感じさせるゴシック調のものから、ガラスやコンクリートの打ち放しを多用した現代風のものまで、さまざまです。ワシントン大学のような郊外の大学は、敷地自体が広大で、図書館の規模も大きく、特に図書館の顔となるリーディングルーム (閲覧室) の多くは、教会建築を思わせる広く贅沢な空間でした。また、図書館のいたるところに、絵画やオブジェなどのアートを見かけました。ワシントン州にある州立大学では州から支給される運営費の1%で、

アート計画を進める義務があるそうです。アートは利用者の学習環境をより快適にしています。ワシントン大学スザロ・アレン図書館では、天井からカラスのオブジェを吊り下げています。「カラスは人々に知識をもたらす」というアメリカ先住民の伝説にもとづいた作品です。



ワシントン大学
スザロ・アレン図書館



ワシントン大学
スザロ・アレン図書館
カラスのオブジェ

このようにアメリカの大学図書館では快適な学習環境が実現されていました。学生は図書館を学習の中心と考え、授業以外の多くの時間を図書館で過ごし、生活の拠点としています。いくつかの図書館では「Welcome to the Library」のサインを見かけました。図書館を生活の拠点として考える学生に対して、図書館も学生を歓迎しているように感じました。



ワシントン大学オデガード図書館 正面入口

規模は異なりますが、アメリカの大学図書館で見られるような取り組みは、立教大学図書館でも進められています。既にグループ閲覧室の利用は可能ですし、情報検索用のパソコンも増設されました。また、図書館活用講座やラーニングアドバイザーなどの学習支援プログラムも開始されています。図書館では今後もみなさんへの支援を積極的に行っていくので、ぜひ活用してください。(図書館学術資料課・小林数彦)